

これも含めると何と合計6本！ 私も疲れたが、妻も疲れたはず。残念なのは、レイトショーでのこの映画の観客は、私たち夫婦を含めて3名のみ。ということは、もし私たちが無理をしていなかったら…？

■□■オーギュスタンとは？■□■

オーギュスタン（ジャン＝クレティアン・シベルタン＝ブラン）とは、女流監督アンヌ・フォンテーヌがつくりだしたちょっと風変わりなフランス人男性の名前。そしてこの映画のタイトルに「オーギュスタン」が使われたのは、この映画はアンヌ・フォンテーヌ監督の『おとぼけオーギュスタン』（95年）の続編（？）にあたるからだ。この『オーギュスタン／恋々風塵』の予告編を観たとき、もちろんマギー・チャンは知っていたが、顔の長いひよろりとした背の高い男性については、顔も名前も知らないし、どんな映画かも全く知らなかったもの。

「オーギュスタン」は、「中国おたく」で「カンフーおたく」というひょうひょうとした風変わりな人物だが、同時に他人と肌を触れ合うことが大の苦手という神経質な面も…。アンヌ・フォンテーヌ監督が第1作目の『おとぼけオーギュスタン』で創り出した「オーギュスタン」のキャラは大受けとなり、「フランス版MR. ビーン」と言われたとのこと（ちなみにこの「MR. ビーン」とは、ローワン・アトキンソン主演の人気お笑い映画だよ…）。「フーテンの寅さん」といえば日本人は誰でもそのキャラを知っているが、このフランス映画を楽しむためには、寅さんとは異質だが、かなり風変わりなオーギュスタンのキャラに親しみをもつことが大切。もっとも最初は何も知らなくとも、映画を観ているうちに誰もがこのオーギュスタンのキャラを好きになっていくこと請け合い…。

■□■オーギュスタンって何モノ……？■□■

アパートに1人住みバリの街を自転車で疾走しているオーギュスタンは、パリでよく見かける（？）俳優志望の若者だが、例によって（？）あまり売れていない様子。やっとありついたチョイ役でもへまばかり…。そのうえ、こいつはちょっとヘン…？目下、中国式カンフーに夢中のようなだが、映画館の中で違法に録音してきた映画を教材としてアパート内で実演している姿は、全然サマにならないもの。そんなオーギュスタンの前に、ある日カンフーマスターが現れ、「修行を積み…」とそそのかした（？）ものだから、俄然その気になったオーギュスタンは、断固アパートを引き払って、パリ13区内にあるチャイナタウンへ引っ越し、カンフー道場に弟子入りしたが…？

■□■マギー・チャンの名作を発見！■□■

『オーギュスタン／恋々風塵』は、前述のように、私が全く知らなかった1999年の作品。張曼玉 作品は数多いが、その中でも1997年の『宋家の三姉妹』と2000年

の『花様年華』は有名で、この映画はその合間につくられたもの。そこで、あらためてパンフを読んで勉強してみると、張曼玉は1996年の『イルマ・ヴェップ』のヒロイン役でフランス映画界に進出し、このオリヴィエ・アサヤス監督と1998年12月に結婚したとのこと。張曼玉は1964年生まれだから、1999年といえど35歳。したがって、あの色っぽいチャイナドレス姿で男たちを魅了した『花様年華』よりも1歳若いときの作品だから、よりチャーミングであるのは当然。

『ローマの休日』(53年)におけるオードリー・ヘップバーンのような可憐さという少し言いすぎだが、パリ13区のチャイナタウンで1人過ごす魅力的な中国人女性像を張曼玉はみずみずしく演じている。そのうえ、彼女がフランス語のセリフを流暢にこなしている(?)ことにもビックリ!1998年12月に結婚したオリヴィエ・アサヤスとは2001年5月に離婚したとのことだが、うまく続かなかった結婚生活の中でもこれだけきちんとフランス語を勉強してマスターし、映画に活用しているのは、さすがにたいした女優根性!

■□張曼玉(マギー・チャン)の役柄は?■□

張曼玉扮するリンは、1年半前に中国広東省からパリにやってきた鍼灸師。13区のチャイナタウン内にある高層マンションで生活するおじさんたちとの同居生活だが、診療室だけは彼女の独立したお城…。鍼灸師のリンとオーギュスタンが知り合うことになったのは、たとえ握手でも他人の肌と触れ合うことができないオーギュスタンが、その治療を求めてきたため。奇妙な鍼治療(?)に不安を抱きつつ、リンの治療に身をまかせてベッドに横たわるオーギュスタンだったが、父親から「中国2000年の技」を受け継いだというリンの技術は果たしてどれほどのもの…。そして、リンの治療が本格的になるにつれて、2人の間に微妙に通い合いはじめた感情とは…?

■□いかにもフランス映画の登場人物その1 プティノ■□

私が観る限り、フランス映画はいつも独特の雰囲気だし、その登場人物もいかにもフランス映画のいうキャラが多い。この映画はフランスで生活するリンのような中国人たちと、逆に中国に憧れる奇妙なフランス人男性の生活に焦点をあてて、その心の交流を描くものだが、そんな物語に厚みを加えるのが、いかにもフランス映画的な2人の登場人物。

その1はリンのフランス語の教師であるプティノ(バルナール・カンパン)。プティノはフランス語の教師をやりつつ19世紀の中国を舞台にした大がかりな小説を執筆している勉強家だったから、リンはその点では大切な情報提供者。こんな信頼関係にある教師と教え子は、ややもすれば微妙な雰囲気になりがちだが、このプティノは「愛する妻一筋」と公言していると通りの真面目な男性。いかにもフランス紳士風なプティノの人物像は、このように「確立」しているようだったが、それでも実は少しくらいは…?

■□■いかにもフランス映画の登場人物その1 レネ■□■

もう1人ブティノ以上に面白くかつオーギュスタンに対して大きな影響力を及ぼしたフランス人がレネ（ダリー・コール）。レネは今では中国人向けの雑貨店「激安アジア」の店長だが、もともとはその店のオーナーだったようだ。それを、今の中国人オーナーに乗っ取られたわけだが、そのことについての彼の説明（弁明）を聞いていると、いかにもフランス人的…？「タダ働きでもいいから」とヘンな条件でこの店で働き始めたオーギュスタンを指導していくうち、レネは少しずつオーギュスタンの面白い人間性を知ることになり…。その結果、レネがオーギュスタンに対して示した行動は、これまたかなりフランス人的なもの…？ その内容と微妙なニュアンスは、是非この映画を観てのお楽しみに…。

■□■どんな結末で終わるの……？■□■

この映画は89分という比較的短いものだが、個性的な登場人物が織りなす物語は多種多様でそれぞれ興味深い。しかし当然に1つの結論が見えるようなストーリー展開ではないから、一体どんな形で終わるのか、私は途中から心配になってきた。1つのおさまりのいい終わり方は、レネの援助を受けてオーギュスタンが中国へ飛び立つシーン。しかし実は、それで終わらないのがフランス映画の凝ったところだ。映画ではオーギュスタンが中国へ飛び立った数年後の姿が描かれ、そこには処女作を大成功させたブティノの姿が。さて、その出版記念パーティーに集まってきた多くの人たちのうちの1人であるリンやレネは今どこで何を？そして気になる主人公のオーギュスタンは、その時、どこで何を？

■□■中仏の交流は？■□■

20世紀初頭の帝国主義の時代、フランスはインドネシア方面を中心に侵略していたことは歴史上の事実。そしてイギリス・オランダ・ドイツなどとともに西欧列強の1つであるフランスが中国の敵であったことも明らか。しかし今は…？

2003年3月に開始されたイラク戦争をめぐっては、アメリカ・イギリス連合軍とドイツ・フランス連合軍が大きく対立し、中国はドイツ・フランス連合軍側についたことも周知の事実。さらに、今年2005年の原油価格高騰問題の中、中国が世界各国から原油をキープすべく新たな戦略目標をたて、中東やアフリカでのパイプラインの建設と海軍力の増強に邁進していることも今や周知の事実。そんな中、「世界の憲兵」を自認するアメリカと中国との仲は次第に…？その反面、近時、急速に軍事面を含めて親しくなっているのが、フランスと中国…？そんなキナ臭い話はそこまでにして、パリ13区のチャイナタウンを舞台にフランス人男性と中国人女性を主人公として、中仏の心の交流を描いたこの映画が、フランスと中国との文化交流を大きく進展させたことは明らか…。

2005（平成17）年12月26日記